

第56回日本臨床ウイルス学会開催報告

The 56th Annual Meeting of the Japanese Society for Clinical Virology

会長 山田雅夫 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 病原ウイルス学)

Masao Yamada (Department of Virology, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences)

去る平成27年6月13日(土)~14日(日)第56回日本臨床ウイルス学会を岡山大学鹿田キャンパス Junko Fukutake Hall (Jホール) 他にて開催し、会長を務めました。本学会は、全国の小児科、内科、皮膚科、眼科など、多岐に渡る臨床医学分野・診療科の医師・研究者から、国立感染症研究所、全国地方衛生研究所でのウイルス検査担当者を含めた基礎研究者、企業等でのウイルス・ワクチンに関する研究・開発に携わる専門家まで、多様な分野の先生方で構成されています。両日とも好天にも恵まれて、約350名の参加者を迎え、盛況のうち、58の一般演題について活発な討議が行われました。

今回の学会テーマは「その時その場の使命」としました。医学ウイルス学が、今後も若き優秀な医学研究者 (Physician Scientist) を引き寄せる研究領域であるように、医学ウイルス学の解決すべき重要な課題に、臨床ウイルス学会とウイルス学会が一致協力して取り組むことができるようにするには、どうあるべきなのかを一緒に考えていきたいと思います、このテーマとしました。

このテーマに沿って、学会1日目午後には、シンポジウム1「感染研・地衛研の連携：その時その場の使命」を開催し、エボラ出血熱、デング熱、SFTS、原

因不明の脳炎・脳症などの喫緊の課題に、国立感染症研究所と地方衛生研究所がどのように連携して取り組むのか討論を深めていただきました。司会は、国立感染症研究所 西條政幸部長と愛知県衛生研究所 皆川洋子所長にお願いし、特に西條部長には、隣国で流行していた MERS コロナウイルスについての解説を急ぎお願いしました。

また学会2日目には、パネルディスカッション「医学ウイルス学：その時その場の使命」を開催し、ウイルス学会、臨床ウイルス学会の歴代会長に、国際連携による感染症研究 (生田和良先生)、重症ウイルス感染症：病態解析から治療法の確立へ (森島恒雄先生)、抗インフルエンザ薬の創薬 (Favipiravir) (白木公康先生)、臨床ウイルス学・臨床免疫学からみたワクチン研究 (庵原俊昭先生) について研究成果を紹介していただき、併せて次世代の研究者に対して貴重な提言もいただきました。

さらに、学会1日目午前に若手奨励賞候補演題セッションを開きました。26題の対象応募演題から選定した9題について、参加会員が一同に会して発表を聞き、3名の若手奨励賞受賞者を選考しました。昨年度から始まった若手奨励賞ですが、多くの応募があり、确实



シンポジウム1「感染研・地衛研の連携：その時その場の使命」

に若手研究者層の拡大と充実ぶりを実感しました。

今年3月我が国からの麻疹排除をWHOが認定したことを記念して、特別企画：「祝 WHO 麻疹排除（measles elimination）認定」を学会2日目午後一番に設け、川崎市健康安全研究所 岡部信彦所長に経緯を振り返ってご講演をお願いし会員一同でお祝いたしました。

新しい切り口のシンポジウムとして「日常診療に直結するサーベイランス体制を！」を、独立行政法人国立病院機構三重病院 谷口清州先生、川崎医科大学小児科学 中野貴司教授に企画いただき、好評を博しまし

た。また、特別講演では、同門の公文裕巳名誉教授に、「固形がんに対する魔法の弾丸“Ad-REIC 遺伝子治療薬”」をお話しいただき、私は「ヘルペスウイルスの病態と自然史」について会長講演をいたしました。

最後になりましたが、この場をお借りして、学会の開催をご支援いただきました企業の各位、同門の方々に厚くお礼申し上げます。また学会の企画段階からご指導・ご支援いただきました小児科学分野の森島名誉教授、塚原教授に心から感謝申し上げます。



特別企画「祝 WHO 麻疹排除認定」岡部信彦先生



シンポジウム2「日常診療に直結するサーベイランス体制を！」

平成27年9月受理

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

電話：086-235-7163 FAX：086-235-7169

E-mail：masao@okayama-u.ac.jp